

私も両親のように

園頭そのがしら 結ゆい

「真夏の太陽が照りつけると、お父さんのけがを思い出すわね。」入道雲の広がる空を眺めながら呟いた母の言葉に父が笑い私も笑った。こんな風に家族で笑いあえるとは、去年の今頃は思わなかった。

「お父さんが会合で倒れ病院に運ばれたので、お母さんが帰ってきたら伝えてください。」

母は仕事で留守にしていた、私が電話に出た。父の会社の人の声が耳元からどんどん遠のいていった。受話器を握る手が震え、冷たくなっていった。「お父さんが死んだらどうしよう。」私の頭の中に、父が倒れる様子が何度も浮かび消えていった。帰ってきた母にとびつき、父のことを伝える私の声は焦りて震え、たどたどしかった。

「結ちゃん、お父さんの病院に行くわよ。」母の瞳は一瞬ぶるりと震えたが、すぐにいつものきりっとした母にもどった。私達は車にとびのり、病院へ向かった。

「まだ処置中なので、会えません。」一分でも早く、父に会いたくて病院に駆けつけたが、会うことはできなかった。待っている時間が、ひどく長く感じられた。

「ご家族の方、こちらへどうぞ。」先生が処置室から出てきて、私たちを呼んだ。思わず駆けだしそうになりながら、ストレッチャーにのせられた父の元へ急いだ。そこには、首にコルセットを巻いた父がいた。鼻は切れ、大きなガーゼで覆われていた。歯も折れ、白いガーゼからはみ出す

頬は、熟したトマトよりも真っ赤に腫れあがっていた。

「お父さん、もう大丈夫よ。がんばったね。」

母は父の手を握り、耳元でそっとささやいた。私は、あんなに会いたかった父に寄り添うことも言葉をかけることもできなかった。太陽のように笑ういつもの父の顔が見えたかった。「結ちゃん、心配かけてごめん。お父さんは大丈夫だよ。」と笑ってほしかった。

「結ちゃん、大丈夫よ。心配かけてごめんね。」

母は私の戸惑いを察したのか、優しく声をかけてくれた。その瞬間、私は父に声をかけられなかった自分を後悔した。だから、父の入院中、父の支えになろうと決めた。

夏休み中は毎日、父の見舞いに行った。不自由な父の手足になろうとする私に、少しずつ父が笑顔を見せてくれるようになった。

「結ちゃん、お母さん、ありがとう。」

二十日後の退院の日、父が言ってくれた言葉と笑顔が宝物になった。指のしびれや首の痛みは残ったが、以前のように仕事に行き、休みの日には私と遊んでくれる優しい父が帰ってきた。父のけがを通して、私は笑顔で安心させてくれる父の優しさと相手の思いやる母の強さを知った。私も両親のように、いつも笑顔で優しい人でありたい。相手のことを思いやりがなばれる私でいよう。両親に素直に「ありがとう。」が言える私になろうと心に決めた。